

(三) 日本人の道徳心

日本人の道徳心については、大別して二つの流れがあるようです。

まず、強調しておかなければならないのは、農耕民族として、激しい農作業に明け暮れる為に、協力・協調を重視する互助の精神が根付いていた事実です。江戸時代までの階級制度の下で、食糧の生産に携わった農民社会では、「村(ムラ)」を形成し、その中での「思いやり」と「助け合い」が常識でした。「ムラ社会」の団結心は、時に、自分達の掟を破った者に対して「ムラ八分」の厳しい処分をも科しましたが、自然災害の多い日本列島で生き延びる為の智慧だったのです。

他方、支配階級であった武家社会では、戦場での功名を第一とした厳しい「躰しんぱ」が幼少の頃から行われました。「恥」を嫌悪し、主従はもとより、同輩の間においても「信義(正しい道理を忠実に守ること)」が最も重視されました。新渡戸稲造は、日本人の精神を欧米人に啓蒙する為に、「武士道」と題した一文を英語で著しました。その一節に、

「 武士の訓育にあたって第一に必要なとされたのは、その品性を高めることであつた 」

とし、

「 武士道の枠組みを支えている鼎かなえの三つの脚は「智・仁・勇」といわれ、それぞれ、智慧・慈悲・勇気を意味している。サムライは本質的に行動の人である 」

(新渡戸稲造著「武士道」・奈良本辰也訳(三笠書房)一〇〇頁抜粋)

と支配階級である武士が品性を重視し、行動の基本に智慧と、慈悲と、勇気とを置いて、「恥辱ちじやく」を蔑視べっししながら、「信義」の為の「死」を恐れぬ精神を日頃

から鍛錬していた事実を伝えていきます。

また、杉本鉞子えつこ女史が自らの体験を著した「武士の娘」の一節には、幕末の武士が「武士であること」に「信義」を懸け、その「武士である」との一言に、疑念なく夜道を同道する家老夫人の実話が紹介されています。

「ある雨降りの真つ暗な夜、一人の若侍が訪ねて参り、父注：作者鉞子の父。長岡藩家老）は捕われの身となり、江戸に送られることになったのであるが、今夜、真夜中頃城外を通りかかる故、その時母に会見をゆるされる由の報告をもたらしました。

母は使いの者を見つめ、もしや何かの計略をかけられるのではないかと疑いました。

「御身は武士か」と問いました。

その男は重々しい態度で刀の柄に手を置いて答えました。

「仰せの通り武士でございます」

「味方にせよ、敵方にせよ、御身が武士ならばその言葉を信じましょう」

（杉本鉞子著「武士の娘」・大岩美代訳（ちくま文庫）三四〇頁）

「こうした農民社会での「互助の精神」と武家社会での「信義を重視」する精神とが、日本人の道徳心の根底をなしており、加えて、聖徳太子が「十七条の憲法第六条」に示された「勸善懲悪」の精神が仏寺の住職によって、折々、「法話」の中で流布され、これらの複合精神が日本人の道徳心を形成したと考えられます。

#### （四）勤労と向学心

更に、日本人の特徴として、地道な勤労意欲と向学心とが挙げられます。

日本人の主食は米ですが、農耕、特に水田稲作において、田植えから稲刈りまで、全期間を通して継続する激しい農作業は、強靱きょうじんな勤労意欲なしには完遂かんすいできません。

大陸から稲作が伝来して以後、米を主食にした日本人は、ただ米を作るだけ

ではなく、列島の気候に適した米を作るための品種改良に努め、更には、「旨い米」を生産するまで改善して、今日に至っています。

「一粒百行」に譬えられる稲作りは、日本人に勤労意欲を定着させ、その習性が、農作業以外の分野においても同様に発揮されてきました。

先の大戦に敗れ、焦土荒廃の中から復興を成し遂げて、世界第二位（注：二〇一〇年、GDPで中国に抜かれ三位となった）の経済力を持つまでに我が国を発展させた精神の根源は、この日本人が先祖代々受け継いできた勤労意欲であったことは間違いありません。

この勤労意欲に加えて、地震・台風等の自然災害の多い狭隘な列島に暮らす日本民族は、古代から、生き延びる智慧を高める為に、朝鮮半島を通して伝えられる先進文化の吸収に余念がありませんでした。

中国に君臨する強大な覇権国家に対して、朝貢を繰り返しながらも、文字（漢字）が伝えられると、民族固有の大和言葉の「表音」に「漢字」を振り当てる作業を独力で行いました。これは、民族として保有する向学心なしでは実行できなかった偉業だと云えます。

やがて、漢文の型式で学んだ「漢字」を、「平仮名」と「片仮名」とに簡素化して、漢文を「漢字」と「仮名」との混合読み下しにしたことが、平易な文章を生み出すことに繋がりました。この日本独自の平易な文章型式は、国民が新たな海外からの知識を吸収するうえでも、極めて有効だったのです。

日本人が如何にして、器用に海外の新知識を吸収したかについて、神戸女学院大学の内田樹教授は、その著書「日本边境論」の中で、

「それは英語やフランス語で論じられることは、ほぼ全部日本語でも論じることができるからです。どうして論じられるかといえ、外来の概念や術語をその都度「真名」として「正統の地位」に置いてきて、それをコロ

キアル（注：通常言語的）な土着語の内に引き取って、圭角（注：とがっ

たかど)を削って、手触りの悪いところに緩衝材を塗り込んで、生活者に届く言葉として、人の肌に直に触れても大丈夫な言葉に「翻訳」する努力を営々と続けてきたからです。」

(新潮新書「日本辺境論」 二四〇頁)

と明快に分析しています。

こうした文章用語の特徴を背景に、歴史の変遷へんせんに応じて、庶民文化が開花した江戸時代には、それまで貴族、武士、僧侶等の特権階級に限定されていた学問が、農民・町民の世界にまで拡大し、「寺子屋」の普及とともに国民全般の知的能力が格段に向上したのは周知のとおりです。明治維新後、新政府による学校制度が迅速に確立できたのも、学業に対する国民の理解が既に定着していたからに他なりません。

資源に乏しい日本が、経済力において世界のトップレベルを確保している、そのパワー源は、国民の弛たゆまざる勤労意欲と向学心であると断言できるのです。

#### (五) 日本人の感性

また、日本列島には、四季があります。

その折々に変化する自然情景に対して、日本人は独特の感受性を醸成してきたと考えられます。

文字のなかつた古代に、どのような自然賛歌があつたか定かではありませんが、日本人の感性の基調となるような、リズム感に富む七五調の大和言葉があつたと推察されます。

何故ならば、我が国最古の歌集である「万葉集」(全二十巻。八世紀半ばに編纂へんさん

され、収容歌のうち実証可能な古歌は七世紀初頭まで遡さかのほる)に収められた四、五〇〇首の約三分の一が、作者不詳として残されている事実からも、広く庶民の間に歌を詠む習慣があつたと考えられるからです。

その後の「和歌」や「俳句」に親しむ国民の数が圧倒的に多いことから、また、先の大戦で出征した特攻隊員の大多数が「辞世の句」を残されたことから、日本人の感受性が細やかであることが判ります。

この観点から日本人を見つめ直すと、四季の移ろい、その美意識の中で成長してゆく個人は、本質的に「優しさ」を素直に理解する人間であって、さんぎやくせい残虐性に凝り固まっではないことが明らかとなるのです。

このように、日本人の性格的な特質を考察してみますと、聖徳太子の時代を経て、脈々と受け継がれてきた「人としての生き方」が、「公的無私的心」に始まり、「信義」を重んじ、「勸善懲悪」を大切にし、互助の精神と勤労意欲に溢れ、向学勤勉で豊かな感受性を秘めた人間として浮かび上がります。

こうした日本人の国民性は、無私の中で「国民の安寧あんねい（異変のないこと）」と「世界の平和」とを祈念される天皇陛下とともに、世界に誇ってよいものです。

ただ、これが何時の時代までの日本人であったのか。

明治維新後、西洋の先進文化に追いつく為に、「坂の上の雲」(作家司馬遼太郎の表現を借りれば)を追い求めた頃の「日本人の原風景」でしかなかったとしたら、極めて悲しいと云わざるを得ません。

日本の歴史を学ぶ中から、民族のアイデンティティ(独自性)を再認識し、先人の多くが培ってきた「日本人の原風景」としての特質を、改めて、修得すべきなのです。